

□海外文献紹介□

消化性潰瘍出血に対するレーザー
光凝固治療

Laser photocoagulation for the treatment of peptic-ulcer bleeding: Krejs GJ, et al (N Engl J Med 316: 1618-1621, 1987)

消化性潰瘍は上部消化管出血の原因として重要であり、その再出血による死亡率は高い。Nd: YAG レーザーが急性出血の止血と再出血を防止しうる手段として、全米で 350 台以上の装置が売られている。凝血塊や露出血管などの最近の出血を示唆する所見を有する潰瘍は再出血の危険性が高いと考えられているが、レーザーでこのような症例での再出血率は著しく減少していると報告されてきている。

著者らは、Nd: YAG レーザーが急性消化性潰瘍出血患者に有用との仮説を検証した。

174 例の消化性潰瘍出血患者(出血している例: 32 例, 出血していないが最近の出血を示唆する所見を

有する例: 142 例)を通常の治療にレーザー光凝固を加えた群(レーザー群)と、通常治療単独群(対照群)の 2 群に無作為に割り振り治療したところ、患者の転帰は以下のごとく 2 群間に全く有意差がない結果であった。

持続性の出血や再出血はレーザー群の 22% に、対照群の 20% に認められた。緊急手術はレーザー群の 16% に、対照群の 17% に必要であった。レーザー群が ICU にとどまっていた時間は平均 41 時間、対照群のそれは 32 時間であった。平均在院日数はレーザー群が 12 日、対照群は 11 日であった。両群に死亡例が 1 例ずつあった。次に、出血している症例に限っての検討でも 2 群間に有意差はなかった。すなわち、レーザーは 88% の症例に止血可能であったが、患者の転帰はレーザー止血しなかった対照群と有意の差がなかった。潰瘍底の露出血管を有した症例のうち、レーザー群では 14 例中 5 例(36%)が再出血したが、対照

群では 15 例中 2 例が再出血したにすぎなかった。逆にレーザーが出血を促したと思われる症例が 4 例あり、更に十二指腸穿孔を合併した症例が 1 例あった。したがって、Nd: YAG レーザー光凝固治療は消化性潰瘍からの急性出血例に有益な治療法とは言えないと結論している。しかし、これで Nd: YAG レーザーの使用をすべて否定するものではなく、angiodysplasia 症例での有用性、更には、食道、直腸の癌性狭窄例の姑息的治療としての有用性を付記している。

【訳者コメント】消化性潰瘍出血における Nd: YAG レーザーの力量に関してほぼ結論が出たように思う。Nd: YAG レーザーは国際学会でも報告の大半が腫瘍治療に関するものになってきており、今度は、姑息的治療法としての評価がなされる時期に入ってきた。

(愛知県がんセンター内視鏡部

伊藤克昭 抄)